

みなさん

長崎大学人 河野 茂です。

今回は、私が最近とても嬉しく感動したことをお伝えしたいと思います。

それは、長崎大学の学生が、長崎大学に来たウクライナ学生のために自分たちに何ができるかを積極的、能動的に考え、行動していることです。

このことに、私は学長として強い感銘を受けたのです。

実は私自身、ウクライナ避難民学生の受け入れ決定以来、学生の皆さんにこのことに關心を持ってもらうためにはどうしたらよいか、考え続けていましたが、妙案はありませんでした。

しかし、私が注意喚起をしたり、まして指示や要請をするといったこともなく、学生の皆さんが動き始めてくれたのです。

ある学生グループは、ウクライナ学生の長崎での生活をサポートすべく、チューター役を買って出てくれました。

また、あるサークルは、互いにお金を出し合い、クラウドファンディングに寄附をしてくれました。

クラウドファンディングに関しては、ほかにも多くの長大生から寄附をいただいています。

さらに、ある学生からは、現地でウクライナ避難民の支援をしたいので、東ヨーロッパに向かいたいという申し出もありました。

安全に支援活動ができるのか、支援のプログラムは明確なのか、支援の母体はしっかりしているのか、など大学としても確認をし、最終的には許可を出しました。

このような行動を自発的に起こしている長崎大学の学生を私は誇りに思います。

ウクライナからの学生は誰もが、祖国やその周辺国に残した家族のことが心配でいっぱいであることは容易に想像できます。

しかも戦禍からの避難であり、所持金も少なく、着の身着のままという状態で、遠く離れた日本へ、長崎へ来るのです。

不安でないわけがありません。

それでも、長崎大学で学びを継続することを選んだ学生たちに、出来る限りのサポートを行い、長崎に来て良かった、と思ってもらえる迎え入れをしていきたいと考えています。

もちろん教員達も動き始めています。

ウクライナ学生のための日本語教育特別クラスの開講準備が始まっています。

各研究科では、来学する大学院生のプロフィールをもとに、どの教員が受け入れるのが最も本人の専門性を活かし、学びの継続ができるかを協議しています。

また、県内市町村では、学生以外の避難民の受け入れも始まっており、教育学部では、学齢期の子供が来崎した場合の教育対応の方法についても検討が行われていると聞きました。

長崎大学には最終的に 40 名程度のウクライナの学生、大学院生を迎え入れる予定です。  
彼らが、長崎大学に来るという決断を良い選択だったと、いつか思い返してもらえるよう、そして、長崎の地にあつて戦禍の痛みを知る大学だからこそ出来る支援とはどのようなものか、これからはしっかり考えて組み立てていきましょう。  
支援の形は様々です。  
これがベストとか、こうでなくてはならないというものではなく、自分にできることを考え行動に移すことが重要なのです。

この機会に、アメリカの黒人女性詩人マヤ・アンジェロウの言葉を心に刻んで欲しいと思います。

People will forget what you said,

people will forget what you did,

but people will never forget how you made them feel

みんなはあなたが言ったことを忘れてしまう。

あなたがしたことを忘れてしまう。

しかし、あなたに対して抱いた感情を忘れることはないでしょう